## 梅崎春生

鬚

サイト「鬼火」開設二十一周年記念

された作品集『 B 島風物誌』に収録された。 [やぶちゃん注:昭和二二(一九四七)年十二月号『文芸大学』初出で、翌年十二月に刊行

底本は昭和五九(一九八四)年沖積舎刊「梅崎春生全集第二巻」を用いた。

者に頼んで書いてもらい、月給だけ貰って喜んでいたところ、 制の小説のみに限定した「森鷗外論」)し、朝日新聞・毎日新聞・N H K などを志願する 作とは言え、 春生は満二十九歳で、この年の三月から六月というのは作品内時制とも齟齬が全くなく、創 保相ノ浦海兵団に入団』することとなってしまうのであった。本篇作品内の時制では、 島」から「幻化」へ― 月勤務したが、役所と違って仕事がきついので三ヵ月の静養が必要であるとの診断書を医 九年春三月には、『徴兵をおそれて教育局を辞職、東京芝浦電気通信工業支社に入社。 即日帰郷となり、その年一杯、療養生活を楽しんで、職に復したものの、まさにこの昭和十 年、陸軍対馬重砲隊に召集されたが、軽度の気管支カタルであったのを肺疾患と診断されて 究所の雇員となった。給料は七十円。現在換算で一万三千五百円前後か。二年後の昭和十七 (一九四○) 年三月 (満二十五歳)、東京帝国大学文学部国文科を卒業 (卒業論文は現代時 「私」の体験内容は梅崎春生の履歴とほぼ完全一致している。中井正義著『梅崎春生― 文中にも注を附したが、最初に言っておくと、本作は小説の体裁をとっているが、 総て不合格で、弱り切っていたところを、旧友の霜多正次の紹介で東京市教育局教育研 梅崎春生には珍しい私小説風のものとも考えられる。 ―』(昭和六一(一九八六)年沖積舎刊)の年譜によれば、昭和一五 六月、海軍に召集され、 主人公 <u>ー</u> カ

として公開する。 なお、本テクストは私のサイト 【二〇二一年六月二十六日 「鬼火」(二〇〇五年六月二十六日開設) 藪野直史】] 二十一周年記念

たと見えて当時 てようと思った。昭和十九年春のことである。 の日記を読むと次のようなことを書いておる。 しそれについても大いに

さな眼を持っているようだが、あれはどういう訳であろう。近頃感じた不思議のひとつであ たいにそぐわぬ感じの人もいる。街を歩いて眺めて見ても、大きな鬚や小さな鬚、美しく刈 る」[やぶちゃん注:底本全集の第七巻に抜粋の「日記」があるが、昭和十九年分はない。 わないはひとえに顔の造作と微妙な関係があるようだ。顔の面積、鼻の高さや角度、頰と顎り込んだ鬚や赤茶けて汚れた鬚、皆それぞれの趣好で顔に付着しているが、その似合う似合 えているのではないかと思われる程しっくりした鬚の人も居るし、地の鬚のくせに付鬚み について計算誤りをしたと言う外はない。今まで見た範囲では、大鬚を立てた人に限って小 の比率、そんなものが鬚を立てる適不適を決定するのであって、鬚の似合わぬ人は自分の顔 「一般的に言って人間の顔には、崖の似合う顔と似合わぬ顔がある様だ。誕生のときから牛 お待ちあれ。] 近々、 梅崎春生の当該「日記」パートを総て特殊な処理を施して電子化する予定であ

ある。 出ない程不安であったが、しかし当時の私はどうしても鬚を立てねばならぬ訳があったの 然として贋者に酷似している。これに鬚を立てればどういう顔になるのか、想像する勇気も必ず顔貌に出るもので、鏡で見ると、色艶の悪い髪は額に乱れ落ち、眼には光なく、顔色蒼 ことは精神が堕落している証拠で、当時の私は全く贋者の生活をして居った。気持の荒れは 変に気取った文章で、此処に書き写すのも気がひける。日記に此のような文体を使用する 顔の造作を顧慮することなく口鬚を生やさねばならない破目に追い込まれていたので その事情を今から書く。

その頃私は東京都の役人であった。

たら生活して行く方途が立たないからであった。もっと美しいもの、輝かしいもの、目の覚 分でぴいぴいしていた。 も情熱を持っていなかったから、勤務成績は極めて悪く、四年経っても雇員という半端な身 れも都会議員などに手蔓を求めて出世をたくらむ才覚を持合せないからであった。 まるかというのが、 である。それなら辞職すればいいのに、依然として毎朝通って居たというのも、 っ端役人にも同じように、傲慢で、不親切で、見栄坊で、けちで、怠惰で、そして卑屈であ るようなもの、そんなものを切に欲しながら、 足掛四年の勤めであったけれども、 唯私が周囲と違っていたことは、私が出世を念願しないということだけであった。そ 私の不潔な呟きのすべてであった。 そしてぴいぴいしていることに腹を立てて酒ばかり飲んでいたの 地位から言えば極端に下っ端であった。そしてどの下 しかもそんなものが現実の世界にあっ 役所を離れ

すべてさびしさと悲傷を焚して

ちゃん注:上記の詩は宮沢賢治の「小岩井農塲 篇のブログの電子化注「小岩井農塲 てさびしさと悲傷とを焚いて」/「ひとは透明な軋道をすすむ」である。全体は私の当該詩 て居るに過ぎなかった。ところが昭和十九年に入ると、事情が 俄 に変って来たのだ。[やぶ と詩人はうたったが、私はそんなものを焚くこともせず、濁った軌道をよたよたとたどっ パート九」を参照されたい。] パート九」のもの。但し、正確には「すべ

番いやだった。一体どうしたら良いかと思い悩んだ末、 ばよかったと後悔の臍を嚙む思いであった。今更油にまみれて機械をいじるなど、誠に迷惑 する気持が私の日常を辛うじて支えていたのだが、こうなると遮二無二出世を計って置け白紙令状が来たという話を聞く度に、私は次第にあわて始めていた。今迄は立身出世を侮蔑 な話である。徴用。言葉からして現世の快楽から隔離された感じである。この事が私には一 として止っていた理由の一半ででもあるのだが、徴用すべき遊休市民も種切れになったと 徴用が始まるというのである。今までは役所は徴用の対象から除外され、それが ついに当局は下級役人に目を着け始めたのである。これには困った。 私は女のところに相談に行った。 同僚の誰々に が役人

「辞めてしまえば良いじやないの」

女は冷然と言下に答えた。

「辞めてしまえばなおのこと徴用がくる」

「だから徴用の来ない処にはいるのよ」

用という機会を捕えて爆発したに過ぎない。まこと徴用こそは、私の脱出の良きスプリング をなだめなだめして勤めていたのだが、常住それから抜け出たいという無意識の願望が、徴 たが、私は周囲の小役人どもの体臭がそしてそれに染んだ自分の体臭が厭だったのだ。自分 気持で出た。まことに晴れ晴れした心持であった。徴用が厭だったから辞めたに違いなか 持って行った。そして再び踏むこともないだろうところの役所の玄関を、私はさっぱりした る余裕は無かった。伝手を求めて他処に移ることに決心して、私は辞表をしたためて役所には役所だからこそ勤まるので、よその処で勤務し得る自信はない。だがそんな事を考えてい は良かったけれど、方向を誤ってまた新しい泥沼に飛び込んでしまったのである。 ボードであった。 それもそうだと、女のアパアトから夜道を戻りながら私は考えた。しかし私のような人 ところが愚かな私は此の踏切板を利用して泥沼を見事に飛び出したまで つ

通い始めたのである。朝は寒いのに暗いうちから起きて仕度をし、夕方は暗い頃でなければ たが都合良いだろうと言うので、訳も判らずに営業部の一隅に席を据えて、毎日朝早くから あるマッチ箱のような素人下宿である。 [やぶちゃん注:「弁天池」 川崎市にある、今は焼けてしまったが、通信機を製造する大きな会社に私は入り込んで 此処を紹介して呉れた布川さんという人が、自分も営業部にいるから君も営業部に入っ 帰り着かぬ。長い間住み慣れた本郷から余儀なく大森に引越して来た。弁天池の畔に 東京都大田区山王四丁目 池に面した四畳半の部屋で、 (グーグル・マップ・データ) 毎晩疲れ果てて眠った。

始めたのである。 ような気持も、やり切れぬとは思ったが運命と思って辛抱した。しかし九日十日経ち、 手持無沙汰な気持も、また誰からも相手にされない癖にどこからか執拗に監視されている の空気が次第に判り始めるにつけ、 新参の勤めの気持は、経験のある人なら誰にでも判って貰えるだろうと思う。白々とした 段々私は自分の軽はずみを後悔するような気持

呉れる。折角紹介して呉れたんだからと私もその時だけは気を取り直すが、布川さんが向う んというのは気が良い男で、私が神妙に勤めているかどうか時々やって来て、元気をつけて ことなら徴用されて機械とにらみ合って居た方がましなような気になっていると、布川さ めて何の仕事もさせないという刑罰が昔あったそうだが、これは辛いだろうと思う。 ような顔をして、毎日爪を嚙んでぼんやりすわって居たのである。何も仕事がなかった。そ を驚かしたことは彼等は役人よりももっともっと官僚的であったことであった。一々 に行ってしまうと 忽 ち気が滅入ってしまう。 上げるのは止すけれども、 あるとは私 して皆私に冷淡であった。私とかかわり合うと損をするといった風であった。一間に閉じこ 役人という人種も誠に愚劣であったけれど、 の予期しなかったところであった。ずるい癖に卑屈で、不親切で、そして最も私 とにかく私はだだっぴろい部屋の一隅で、 会社員というものがこんなに愚劣な人種で おあずけを食 つた犬の こんな

根底から失われて来たのである。 だがそんなものから自分を隔離するという事は、人生に対する冒瀆であり、ひいては神に対 会社は退けが五時半だから、とてもそんな事は出来やしない。だいいち女に逢いに行く事 ら出来ない。私はもともとストイックな趣味は持ち合せないし、 をさぼって国民酒場に並んだり、牛込の濁酒屋に昼頃から行列することが出来た。処が此の して冒瀆であるという信念を持って居たから、 のは私のささやかな快楽からすらも遮断された事であった。役所に居た頃は、それでも勤務 しかし、これ程とは思わなかったにしろ、 いくら私でも知っていた事だから我慢して行く積りであったが、私が辛抱出来なかった で、辞めようと思った。 現実世界に美しく楽しい仕事がある筈がな もはや私が此の軍需会社に席を置く意味は 現世の快楽と言うと大袈裟 6.1

どうにかして布川 逢えないし、 るうちに、私はふと病気ということを思いついた。そうだ、病気なら辞めても可笑しくない 於ける大日本帝国の一流軍需会社の内情は、こんなにも愚劣であったということを記録し 他人と感情の摩擦を起すことは生来私の好む処ではない。しかし辞めないことには女にも て後世に残さねばならぬ。 辞めようと思ったものの、まだ一箇月も経たないのに辞表出したら、 私は病気になる決心をした。 の布川さんがいくらお人好しとは言え、面目玉を潰して厭な思いをするだろう。 先ずあんな冷たいところはいやだ。あんな愚劣な世界はない。昭和十九年頃に (さんの面子を潰さずに辞める方法はないものかと、 そう思って原稿用紙を買って来て下宿の机上に置いてある程だ。 あれこれ思案して 皆変に思うだろうし

は生れつき智意は余り無いくせに、 そんなことには頭が良く働くたちだ。 その夜暗い 大

だん悲痛な顔色になって来たんだろうと思う。医師は私を慰めながら、 の自覚症状を申し立てて、首尾よく診断書を手にすることが出来たのである。自覚症状は本 で肺病の本を十分間ほど立ち読みして覚えた。 の街をあちこち歩き廻り、すぐ診断書を書いて呉れそうな医院を探しあて、さまざまの贋 何だか本当に自分が病気に冒されているようなものものしい気分になって来た。だん 医師が問うまま自覚症状を答えているう 用紙にさらさらと次

右側肺尖加答児四箇月ノ休養ヲ要スルモノト認ムのように書いて呉れた。

部の結核性病変で、 粘液の分泌が盛んになって上皮組織の剝離や充血などが見られる症状を言う。 「肺尖加答児」(「カタル」はオランダ語 catarrhe・ドイツ語 Katarrh で、粘膜の滲出性炎症。 それを読んだ時、にがいものが口腔の中にたまって来るような気がした。[やぶちゃん注 肺結核の初期症状である。] ここは肺尖

のは心苦しいし、だい そういう事情だから辞めさして頂きたい、 いち私の気に済まない。 入社早々病気欠勤してその間月給を只貰う

と思えばそれで済むのですから、などと押問答しているうちに、布川さんはふと思いつい に肩をたたいて呉れた。いやそういう訳には、私の良心が許さないのです、入社しなかった しょう、会社から月給貰ってゆっくり養生すればいいじゃないですか、と私をなだめるよう そう言ったところが布川さんは人の好さそうな眼をしばしばさせて、 そんな事は な 61

「しかし辞めると言っても君は此の会社に現場徴用になっている筈ですよ」

部長に出そうという私の腹であった。そして布川さんの説明によって、戦争の終る迄は死に でもしない限り、私は此の会社と縁を切る訳には行かぬことが呑み込めて来た。まことに つを話す前に、もはや部長の手に提出してあるのである。辞表だけは布川さんの諒解を得て 何ですか現場徴用というのは、私はあわてて聞き返した。診断書は布川さんに事の いきさ

を教えて呉れたり、始めからこんなに親切なら或は私も病気にならずに済んだにと、 なるものらしかった。お大事になさいとか、僕も昔やったことがあるがなどと、なおる秘伝 ように親切になったのは、今もって私には不思議である。他人が不幸になると人間は寛大に の中で毒づきながらあいさつを済まし会社の門を飛び出した。駅の方にてくてく歩きなが らない事に決ってしまったのだ。そんな恐い病気に私が犯され、そして長い間休養しなけれ ならぬことが周囲に知れ渡ると、 れども後の祭りであった。そしてとうとう不幸にも私は向う四箇月間養生しなけれ もはや事態は私の計算をはみ出て進行し始めたのである。 どうにでもなれと思った。 いつもは冷たく仕事の上では不親切な人人が、掌を返す あわててあちこちと折衝した 私は腹 にばな

次々に見て昼頃ぼんやり眼が覚めた。起き上って部屋の中を見廻した。 すぐ頭にきた。嬉しいような不安なような気持で、 時ものように早く眼が覚めた。今日は会社に行かなくて良いのだということが 蒲団をかぶって又眠った。 見廻してもさて何す 色々な夢を

ることもない。

これが私の克ち得た境遇なのか?

っている。一応私は身軽になったように見えて、その実身軽には動けないのだ。何をしたら 猿をつないだ繩の端を猿廻しが持っているように、私を繋いだ紐の端を会社がしかと握 のか判らない。 又蒲団に私はもぐり込んだ。

てもぐって行く。 れた桜の花片が細い道を埋め隠している。池の面に浮んだ花片を鯉が時々顔出してくわえ 夕暮になった。私は起き上り窓際に腰かけて、池の端に咲いている桜を眺めて 眠り足りて身体が重く、春の愁いのかたまりになったような気がした。

借りたい此の時局に、心身共に健全な私が手を束ねて無理矢理に朝寝をしなければならな ら安逸無為を愛する私といえども生きて行けないような気がする。 むすべもない。しかしせめて三日に一度なりとも東京に出て、お酒を飲んだり本郷のアパア る人々の跫音であろう、次々に近づいては遠ざかって行く。飛行機を造るために猫の手でも トにいる私の女に逢いに行ったりしてはいけないだろうか。そうでもしないことには、い 。まこと後ろめたい感じである。しかし之も私の微妙な計算違いから来たもので、誰を怨 翌朝も早く眼が覚めた。窓の下の道を、いずれあちこちの工場に徴用されたりして出勤す

軍省や造兵廠に連絡に行く為、営業部の連中はしょっちゅう川崎東京間を往復しているの えがあった。 を通る跫音を数えながら思い悩んでいると、 て居るところを見られたら、結果が思いやられる。どうにか解決の方法はないかと、窓の下 合せる危険が多分にある。絶対安静にして居る筈の私が、血色の良い顔で省線に乗ったりし である。その為の定期券が何枚も用意されている程だ。大森から省線に乗るとすれば、 ところがそう簡単に行かなし事情があったのだ。会社の本社が日比谷にあったし、また陸 天啓のように私の頭にひらめいたひとつの考

そうだ。口鬚を立てよう。

えれば、あの連中は頭が悪そうだから胡麻化しが利くのではないか。 しまうだろう。 忘れないにせよ印象はぼやけて来るに違いない。 そこでもって顔形を少し変 口鬚を立てれば判るまい。勤めた間が短かったから、うまく行けば彼等は私の顔を忘れて

るような気がした。 の代り生え揃ったら酒も飲めるし女にも逢える。 しかしそれにしても鬚は一朝一夕にして生ずるものではない。それは仕方のない事だ。そ 私は愉しさのため急に胸がふくらんで来

ぼとしまりが無くなって来たのである。 はゆっくり起き、昼から夜にかけて煙草すったり本を読んだり、夜中にはこんこんと眠って あとは余白のまま日が経つにつれて薄いほこりを重ねて行った。 て来ないのである。机上にのべた原稿用紙の第一行には、軍需会社、と題名が書かれたきり、 忙がしい会社の生活と打って変ってのんびりした日々が、こうして始まったのである。 そのうちに私は段々と肥って来るようであった。胸の辺に肉が付き、身体全体がぼと 暇になったら書こうと目論んでいた小説が、机の前に坐っても一句も浮び上っ その上自分でも判る位に万事挙動にくぎりが無く そのうちに小説を書こう

上げ下げも省略した。物憂い春の空気の満ちわたる部屋の中で、昼間でも寝床に入って、近 がら女のことを空想する。 くの貸本屋から借りて来た小説を読みふけった。読み疲れると天井をむき、煙草をふかしな などという気持も忘れてしまった。日記もつけなくなった。掃除も怠るようになり、

たような事を私はとりとめもなくうつらうつらと考え続ける。 三年や五年はかかるだろう。やはりハアトのキング程度で我慢するほかは無かろうとい 撫でて居る。 もいい洗濯を始めたがるのが女の癖であった。そんな癖を想起しながら私の指は鼻の下を 出されて来る。私が訪ねるときまってすぐチャカチャカと台所仕事を始めたり、 ・ダ・ヴィンチや佐久聞象山のような破局的な鬚が好きだが、あんな鬚を立てるまでには ハアトのキングみたいに高雅な感じになるかも知れない。私の好みからすれば、レオナル 相談に行った日以来私は女に逢っていない。 此の鬚さえ伸びればと思う。 近頃肥って来たから、うまい具合に行け 床の中で女を考えると変になまなまし しない 私の鬚 で

潰して行きながら。 身となって犯人の探索に従事したのである。 みふけった。もう文学も何もなかった。探偵と一緒に犯人を探すことだけが私の生甲斐であ 暮になると大森駅近くの貸本屋から探偵小説を借りて来て、蒲団の中で深刻な顔をして読 年であった私はどこに行ったのであろう。頭の片隅で鈍い悔いを意識しながら、それでも夕 借りて来て読み出すと、頁半ばにして眠気を催してしまうのだ。あの若い頃の俊敏な文学青 状態を何と呼ぶべきだろう。頽廃と言うには筋金が入っていないし、安逸と呼ぶには悲しみ れた迷路に、擬似の興奮と戦慄を強いられながら入って行く。言わば私は心身をなげうち捨 命の如く突然人が殺される。私は直ぐさま名探偵と一緒に現場にかけつけ、巧妙にたくらま った。未だ見知らぬ異国の、 があり過ぎた。脳の外側にぐるりと不透明な膜がかかったようで、例えばまっとうな小説を 此のような境遇に追い込まれたら、私ならずともこんな阿呆な具合になると思う。 シヤンデリヤの下で、街のアパアトで、河岸のくらがりで、宿 漠然とした悲哀とにがい反省をひとつひとつ

手鏡を取り出して前に据えた。 からは鮮やかな緑の若葉が勢よくふくれ上って来た。もう良い頃だろうと私 窓の外に桜の花は咲きほうけ、 やがて一ひら一ひら散り池の端を埋め尽し、 散り果てた後 は窓に腰 かけ

惨に見えた。 い春風がそよそよと顎の鬚をそよがせている。眼が赤く濁り皮膚はたるみ、 汚れた手鏡の面に、葉桜を背景として鬚もじゃに荒んだ私の顔がぼんやり映っ 私は窓をしめ跫音を忍ばせて下宿の玄関を出て行った。 鏡を横にずらしたり、 かざしたり、下から映してみたり、 あらゆる角度から調 ことのほか陰 てい た。

何か見るに堪えない気持があって私はわざと横を向いたりせきばらいしたりなどし 雰囲気の中で無精鬚に埋まった私の風貌は、 くして私は理髪店の椅子台に、 白い布で顎から下をおおわれて腰掛けていた。 大きな白い鏡面の中でいっそう孤独に見えた。 て胡麻 明る

よ鬚を剃る段取りになったとき、 私はふと危惧を感じて薄眼を開き、 掌をひらひら

と動かした。「ここは残すんだよ」

うっかりして剃り落されたら今までの苦労が水の泡になる。

感じである。 ていたのに、 にもない。 丁度鼻の下が垢じみて汚れた感じである。無精鬚としては道行く人も振り返る位堂々とし った。鼻の下には何も無かったのだ。 やがて剃り終った。椅子の上に起き直り鏡を眺めたとき、私は少からず失望せざるを得な がっかりしてとぼとぼと下宿に戻って来た。これではまだ当分女には逢えそう いざ本物になった時には影みたいにたよりないのであった。何だかだまされた いや、何も無いと言っては嘘になる。何か薄黝く、

鬚に対する無関心のせい一ぱいの表情であった。薬指の腹で撫でると、奇妙な触感が私の心 た。指でさわる時も人さし指や親指では触らない。薬指の腹で撫でるのである。これが私の 念頭に置かないがいい。 をほろ苦くした。まだ撫でていたい欲望をねじふせると、急いで私は探偵小説の読み方に 毎日心配していると、仲々思うようには伸びて呉れないものらしい。むしろ鬚のことなどは りかかる。春が次第に闌けて行った。女から葉書が来た。 またしても懶惰なる生活が始まった。鬚などというものはまだ伸びないか伸 そう気付いたから鏡をのぞくことも出来るだけつつしむことにし び

ます思慕の情が募った。 又取り出してはやさしい筆遣いを打ち眺めていると女の顔や身体のことを思い出してます 近頃顔を見せないがどうしているか、という文面であった。その葉書を読み返し読み返し

北」オーストラリア北方のインドネシア東部とニューギニア方面。〕 を必死になって想像している。外の跫音から心を外らすために。 ると蒲団をかぶり、 莨のやにに染った指で鼻の下を撫でている。灼けた弾丸と人血の臭いがするあの荒涼たる人間の現実にも―― 此の瞬間だけであった。私はその瞬間身を硬くし、じっと跫音を聞いている。 びた世界に通じているのだ。そしてそれと同時に、南海派遣とか濠北派遺とか名付 か反省を超えた言いようのない孤独感であった。あの跫音はそのまま森森と機械が唸る荒 ぎに寝床の中で目覚めている。 だらけた一日中のうちで、 何かが私の意識を叩きに来るのは 朝早くと夕方遅く、相変らず窓の下の道を跫音がつづいて通る。その時刻だけは -私は急いで聯想を断 そして鬚を立てた私の顔 [やぶちゃん注 それは自責と けられる き切り

ていた。止めても止まらぬものならば、私は人もふり返るような見事な鬚を完成するほ けが止まらなかった。私とは関係なくふざけ方が進行して行くような具合だった。それに似 不快になって行くのが判っていても、そして自分でも不快になってしまっても私は悪ふざ 友達と雑談している時、一度ふざけ出すととめどがないのが私の癖であった。相手が段々 の中で私は一心に自分にそう言い聞かして居た。 か は

また窓縁に腰かけ幾分の期待をもって鏡をのぞき込んだ。 日が経った。もうそろそろ大丈夫だろうと思って、 抽出 しの奥から鏡を取 り

明るく晴れ上った空を背にして、無精鬚が再び顔中に密生していた。 の部分の無精鬚を剃り落しても結構独立の存在を保っ ひいき目のせ て εý るように γ, · か 鼻

子台の上に招じた。 衣を更えて出て行った。此の前の理髪店で、此の前と同じ理髪師が同じ服装と表情で私を椅 見えた。しかし眺めて居れば居る程気持が悪くなりそうなので、私は鏡を置いて立ち上り、

返しのつかない失敗をした時の感じにそっくりであった。鏡にうつっているのが私の顔だ は鏡面の顔から心弱くも視線を外らしていた。 の顔は鬚など生やすべき顔ではなかったのだ。今見た大鏡面の中の私は、ぶわぶわとふくら からこそ私は我慢して眺めていたのだが、之が他人の顔なら思わず戦慄するに違いない。 しい鬚であろう。崖にとりついた不潔な蔓草のように赤茶けて鬚がしがみついている。とり んだ顔の中央に絡印のように哀しい鬚をつけ、そして照れくさくわらっていた。何という哀 暫く経って私は誠に落胆し、嫌悪の情で腹が真黒になって理髪店をよろめき出て来た ハアトのキングなど飛んでもない話であった。日記にまで書いて危惧した通り、

体の印象を調べなければならない。 けただけでは駄目である。鬚というのは人間の印象の一部分に過ぎない。鬚を中心として全 た喜びであった。私は半ば爽快に半ば自棄に勢良く床を離れた。東京に出るとしても鬚をつた。 翌朝になった。それでも眼が覚めた時最初に頭に来たのは、今日は女に逢えるという濁 つ

使用したことはない。ネクタイも赤い大柄のを選んだ。手鏡の中で次第に私の風采が変化し て行く。最後に鳥打帽を斜に乗せ、手鏡を顔に近づけた。 私は押入れの中から古ぼけた鳥打帽と春の合服を取り出した。両者とも会社勤めの時に

これが私の青春の姿か。次第に高まって来る嫌悪をねじふせかねて、思わず私は呟いた。の下に、黄色くむくんだ顔が見るからに厭らしい鬚をつけ、それがじっと私を凝視している。 「いい加減にしなよ。ほんとに」 これは何という顔であろう。まるで出来損なった探偵である。日に焼けた鳥打帽 ひさし

けになって、そして私の青春も間もなく終るのだろう。それまでは此の傷口のような鬚を曝 たい。ただそんな生き方が今の時代には出来ないのだ。私は傷ついている。傷口をわざと押 ることで自分を確めたかったのだ。私といえども胸を張って悔いない透明な軌道をすすみ して進んで行く外はない。 し拡げ、自ら感ずる苦痛だけが私には真実であった。ますます傷は深くなって行く。傷だら 悪ふざけも、もう沢山ではないか。 しかし私は人間らしく生きたかったのだ。悪ふざけす

まま玄関から出て行った。 ふと涙が出そうな気がした。私はあわてて立ち上り部屋中を二三度歩き廻り、 そしてその

女のアパアトは本郷の露地の奥に傾いて立っていた。

をした。入れとも言わず扉の間から首だけ出して私をみつめた。 私が扉をノックすると暫くして女が出て来た。私の顔を見て、何とも言いようの

ぶるいをするのがはっきり判った。 「やって来たよ」と私が言った。言いながらにやにや笑ったんだろうと思う。 暫くして私を見つめたまま女が言った。 女が微かに身

何なの、それは」

「ひげ?」女は痛苦に堪えないような顔をした。「何故鬚なんかをくっつけているの?」

「だって鬚を生やさなければ君に逢えなかったんだよ」

女は冷たい表情で私の話を聞いていた。 私は廊下に立ったままで、都庁を辞めた以後のいきさつをしどろもどろしゃべり始めた。

「で、そういう訳なんだよ」

女は視線をゆっくり私の頭から足先に移動させ、又ゆっくり私の顔に戻した。

「いやだわ、ほんとに」女ははっきりした声で言った。「あなたの顔や恰好は、 まるでサア

カスよ、そんなのいやよ」

は何の為に鬚を生やしたのか判らなかった。 れば熱する程、女はますます冷たくなって行くらしかった。此の女に見離される位なら、 くてたまらなかった。私は廊下に膝をつかんばかりにして女に私の気持を訴えた。私が熱す サアカスという言葉を聞いた時、大粒の涙が私の瞼からころがり出た。私は悲しくて悲し

「鬚を剃ったら又いらっしゃい。それまではお断りよ」

冷然と女は言い捨てて、 扉を音立てて閉じた。

話はそれだけである。

揺られて九州に帰った。鬚は海兵団に入団する前日、佐世保の床屋で剃り落した。 一年有三箇月、私は終戦まで海軍の下級兵士として人並みな苦労をなめた。 それから二三日経って私に召集令状が来た。即日私は荷物をまとめて、二十四時 それから 間汽車に

のかも知れない。もしそうだとすると此の数箇月間は私は全く独角力を取っていたというあろう。また生毛のかたまりに過ぎなかったものを、私だけが鬚のつもりに思い込んでいた ず、此の写真の鼻の下にはほとんど鬚らしいものは認められない。写真の具合によるのでも ことになる。 どく力んだ感じだが、記億の中では此の時は勿論充分鬚の形をとって居た筈にもかかわら 今私の手許に一葉の写真がある。東京を離れる時撮った写真だ。赤だすきを肩にかけ まことに佗しい話だと私は思うのである。 ってひ

先日暇があったので行ってみたら、本郷は焼野原になっていて、アパアトの付近は麦畑と 春風の中を雲雀のみがピイチク啼いて居った。 女はどうしたのか判らない。